



民衆版画の中心地、エピナルのイメージ・ミュージアムを訪ねて

熊谷 謙介

(非文字資料研究センター 研究員)

大衆向けの版画をさかんに生産したことで歴史的に名高い、フランス東部のエピナルを訪問する機会を得た。「エピナル版画 imagerie d'Épinal」は、たとえ実際には別の都市で生産されていたとしても（ドイツに近いナンシーやメッス、オルレアンやトゥールーズも製作地として有名だが）、民衆版画を総称する代名詞として使われたものであった。筆者の専門とするフランス 19 世紀文学においては、「エピナル版画」は、粗雑な様式と政治的・宗教的に保守的な題材も相まって、文学者や批評家によって多くの場合悪く語られてきた印象がある。一方で、その素朴さや平面性を感じさせる構図等が、同時代の前衛芸術に与えた影響に注目する論者も存在する。

しかし、非文字資料研究という文脈から見た場合、このような美学的視点よりも興味深いのは、近代フランスの民衆生活において、イメージがどのように流通し、どのように使用されているかという、民俗学的視点であろう。現在、筆者が所属する研究グループは「絵画・版画・写真に見られる 19 世紀ヨーロッパの都市生活」というプロジェクトを進行させており、19 世紀後半に起こった、絵画・版画・写真に代表される複数の視覚メディアが混交する状況の中での民衆の都市生活の情景の解明を進めている。その中で注目すべき「版画」は、第一義的には、その細やかな表現からこの時代に隆盛したりトグラフ（石版画）であった。しかし、その基盤にあり、また 19 世紀において、とくに地方におけるイメージ環境において重要であり続けたのは、木版によって製作された版画 xylographie であり、エピナル版画である。今回、班を代表して、ヨーロッパの民衆視覚文化を考える鍵を探しにエピナルへと向かった。

エピナルは、フランス東部の中心都市ナンシーから鉄道で約 50 分南下したところにある街である。駅を降りて約 15 分、街を流れるモゼル川沿いを歩いてくると、目指すエピナル市イメージ・ミュージアム Musée de l'image が見えてくる（図 1）。ここで「ミュージアム」という訳語にしたのは、「美術館」と「博物館」の区別

をつけない方が良い施設に思われたからである。以下に説明するように、エピナル版画をただ美的対象としてのみ見せることを避け、「歴史の中で民衆が、どのようにイメージとともに生きてきたか」を中心に展示が構成されているからである。なお、同館のそばには、19 世紀以降を馳せた版画業者・ペルラン社のアトリエがあり、工房を見学することもできる。

今回はこのミュージアムに集中して報告したい。2019 年 8 月 17 日に訪れた際には、企画展として「壁にかけられたイメージ」展が開かれていたが、それは今回の訪問で知りたかったことを十分に伝えてくれるものであった。最初に設置されていたのは、山深いサヴォワ地方の民家で見つかった、古いものでは 400 年も前にさかのぼる版画が何枚も貼られたまま残された壁や戸であった。また、シャルトルに近い村の民家のたんすには、18 世紀にさかのぼる、キリスト像やマリア、女性の聖人像をはじめとした版画が貼られており（図 2）、当時の人々の「イメージ使用法」が浮かび上がってくる。すなわち、ゆめゆめ額縁に入れて「芸術」として鑑賞されるものではなく、聖像によって家族を疫病などの苦難から守る「護符」として家財に貼られ、拝まれていたものなのである。「家族と家を守る幸いなる福音」と題され



図1 エピナル市イメージ・ミュージアム



図2 18世紀の版画が貼られたたんすの両扉
© Coll. Mairie de Saint-Jean-Pierre-Fixte

た版画が玄関口に飾られていた例も紹介されていたが、まさに家内安全・無病息災を願い、家財や家畜が害を受けないように願う「お札」としての機能を果たしていたのである。

一方で、イメージ群を左右対称に配置するという「モンター

ジュ」からは、たんすというインテリアを利用して、ささやかな「祭壇」を作り出そうとしたのではないかという想像を巡らせることができる。こうしたものは作品であるより先に、現代で言えば、部屋に飾られる好きな有名人のポスター、思い出の写真のアルバム、さらに言えば何気なく冷蔵庫に貼られたマグネットの数々のようなものであることを、思い出させてくれる。他にも、聖像を中心とした版画を貼られた小箱やスーツケースが展示されており、そこに当時の人々の信仰心の篤さを見ることもできるが、ある種の装飾的機能への転化も確認できるだろう。図版に挙げたものは穏やかな色調だが、時代を下って普及していくエピナル版画自体は、青、赤、黄色などの原色やピンクといった、けばけばしい色調が特徴的であり、そこには当時、照明が乏しく薄暗かった部屋を明るくしてくれるという効果に対する需要があったと言われている。紙に刻まれた聖像は、宗教的にも物理的にも、家に光をもたらしたのである。

また、こうしたイメージを地方の小さな村々にまで伝えたメディア（媒体）として、版画行商人の存在を無視することはできない（図3）。鉄道が普及したのは19世紀の中盤であり、新聞の文章に挿絵や写真が挿入され始めるのも世紀末のころであることを考えれば、地方の庶民がイメージに触れる機会はきわめて少なかった。行商人が示す版画を食い入るように見つめる人々の顔には、地域や時代を問わない、人類のイメージに対する欲望があらわになっていると言えよう。

このような前史の後で、企画展や常設の展示が示して



図3 ジャン=ジュリアン・ジャコ《版画の行商人》（『ジャコ作品集』（1845）より）
Coll. Bnf, Paris

くれるのは、イメージの機能の拡散といった現象である。革命後、人々の信仰の対象には、聖像だけでなくナポレオンや共和国が付け加わっていくが、世俗的なアイコンにおいても聖人同様の表象様式（色彩構成・アイテム・レイアウト…）が確認できるのは興味

深い点である。ナポレオン軍を描く政治的イメージは、子供に愛国心を植え付けることに役立ったが、教育というのもイメージが果たす重要な機能である。今で言う漫画のような構成で描かれる絵物語にとどまらず、切り抜いて使える着せ替え人形や、自動車・建築物のプラモデルならぬ「紙」モデル、図鑑など、様々なイメージ使用方法が紹介されていた。

企画展を開くことに詳細な図録解説が作成されており、今回の報告にも役立てることができた。またフランスのみならず、他の地域の版画の収集も進めており、日本についても日露戦争時の版画を確認することができた。またミュージアムのコレクションについては、電子化したものをサイトで公開しており、非文字資料のアーカイブ公開の事例としても参考になるだろう。

エピナル版画は子供から大人まで、民衆文化において深く根を下ろしており、またこうしたイメージ環境は現代にも違った媒体を介してではあるが、同様の図式によって構成されていることを、改めて認識することができた。また合わせて、フランス南西部のバイヨンヌにてバスク・ミュージアムを訪問し、ルルドやオロロン・サント・マリーにて、ピレネー（ベアルン地方）文化の展示を見ることができ、ヨーロッパの多様な民俗文化の一端に触れることができた。非文字資料研究センターの予算でこのような機会を得られたことを、まずは感謝したい。